「父の広島体験聞けず」悔い胸に奔走

磯谷さん遺志

被爆２世結ぶ

県組織設立 語り部やエッセー

高齢化する被爆者の体験を語り継ごうと、7月に発足した県原水爆被害者の会の被爆2世組織「二世部会」。発足にこぎ着けた陰には、がんを患いながらも部会設立の準備に奔走し、発足直前の4月に亡くなった被爆2世の磯谷臣司（いそや・しんじ）さん＝享年(64)、静岡市清水区＝の尽力があった。「父親から広島での被爆体験をもっと聞いておけばよかった」。生前の磯谷さんから後悔の思いを聞いていた関係者は、8月6日「原爆の日」を前にあらためて遺志を胸に刻む。（社会部・大沼雄大）

▶二世部会の立ち上げに向けた準備作業を進める磯谷臣司さん（右から3人目）ら関係者＝2016年12月18日、静岡市清水区

磯谷さんが県原水爆被害者の会に関心を持ったのは2015年。父欽哉さん＝享年(89)＝を亡くした翌年だったという。「自分にできることは何か」と川本司郎会長(80)＝静岡市清水区＝に相談を持ち掛け、それまで停滞していた二世部会の立ち上げに積極的に携わるようになった。

欽哉さんは伊豆半島の生まれで、戦争中、大勢の兵隊とともに広島に配属された。原爆投下の1945年8月6日の朝は、空襲時に避難するための防空壕（ごう）の掘削作業をしていて熱線を浴びずに済んだが、放射線を受け被爆したという。磯谷さんは広島での父の足跡をたどろうと、広島平和記念資料館に出向いて調べたこともあった。

二世部会発足の準備を請け負って活動していたさなかの15年12月、静岡県で実施する2世対象の無料がん検診で胃がんが見つかった。16年3月に胃の全摘手術を経て活動に復帰。広報紙を送って結成メンバーを募ったり、親の被爆体験をつづるリレーエッセーを編集したりするなど、周りが体調を気遣うほど打ち込んだ。

「戦争の話をしてくれる親がまだいる2世は幸せだよ」と話していた磯谷さんだが、がんが再発し、今年4月上旬の会合に出席したのを最後に、4月下旬に息を引き取った。

川本会長は「2世組織への引き継ぎが全国的な課題になる中、磯谷さんの熱心な活動は関係者に注目されていた」と惜しむ。「原爆の日」に合わせ広島市を訪れている二世部会の磯部典子代表(66)＝磐田市＝は「2世同士のつながりや組織の土台をつくってくれた。磯谷さんが目標にしていたエッセーのまとめや語り部活動を発展させていきたい」と遺志を継ぐ決意を口にした。

＜メモ＞県疾病対策課によると、県内の被爆者は3月末現在で563人、平均年齢80・42歳と高齢化が進む。「県原水爆被害者の会」の二世部会の会員は22人。高齢化する親世代の戦争体験の継承や2世同士の交流、静岡県と東京都でのみ認められている2世対象の無料がん検診の普及などに取り組む。

静岡新聞

© 静岡新聞社　無断複製転載を禁じます